

抜かずの刀

岐阜県立加納高校 3年

越野元左衛門はぶらぶらと町を歩いていた。景気がよくない近頃だが、客引きの声や客の笑い声には活気がある。

「越野さま、上等な着物があるんですがね、奥様におひとついかがですかい」

「折角だが、今日は何も買うつもりはないのだ。すまん」

親しげにいろいろの店の番頭、手代が声をかけてくるのを笑ってやり過ごす。箕垣藩きつての剣術の達人として名の通った元左衛門だが、下々の者にも分け隔てなく接するので町人らにも慕われていた。だが昨今の日照りや長雨で米の作柄が悪く、武士はみな苦しい生活をしてきた。着物など買う余裕はない。

「てめえ、ぶざけやがってー」

突如として、往来に怒鳴り声が響き渡った。見れば、ひれ伏さんばかりに頭を下げる女を睨みつける若い男がいた。刀を抜いて、今にも切りつけそうな剣幕である。

元左衛門は何事か喚いている男のもとに近寄り、

「こんなところで刀なんか出してどうしたのだ。この女が命でも狙ったというのか」

居丈高な口上を遮られ、不機嫌極まりないという渋い顔で男は答えた。

「この女、俺に米のとき汁をぶっかけやがった。侍に向かつてなんてえ無礼だ」

元左衛門は呆れを隠そうともせずと言った。

「お前、そんなくだらないわけで人を切ろうというのか。阿呆も極まったやつだな。農民どもだってお前より頭がいいぞ」

「うるせえー」

怒りの矛先を元左衛門に向けた男は、抜き身の刀を元左衛門に突き付けた。

「てめえから切り捨ててやつてもいいんだぜ。すつこんでろ」

臆することなく元左衛門は呵呵と笑い声を上げた。

「やってみればよからう。ただし、真つ向勝負でな」

「ああ、そうしてやるさ。この場で勝負だ。さあ、構えろ」

「そう急くな。我の名は越野元左衛門。戸部家に仕える者だ」

「俺は柳井竹之助だ」

おそらく竹之助とやらは浪人だろうと元左衛門は考えた。仕えていた家が断絶したので当てもなく過ごしているのだろう。女を切ろうとしたのは憂さ晴らしだ。戦がなくなつて久しい。人を切つたことのある者などほとんどいない。学んだ剣術を持って余しているのだろう。

刀を抜こうと柄に手をかけて、はたと元左衛門は手を止めた。右手で柄を握り、左の手で鞘をそのまま掴んだ。刀を鞘に収めたまま、正眼に構える。

二人の武士を見守っていた者たちは、名人と知られる元左衛門が若僧に敗れるはずはないと安心して見物していたが、鞘のまま構えるのを見て、何を考えているのか、とみな一様に戸惑い顔になった。

最も訝しんだのは竹之助である。

「どういふつもりだ、てめえ」

「見ての通りだ。このまま相手をしよう」

「——刀を抜かずにやろうつてのか」

「お前のような浪人ふぜい、これで十分だ」

ついに竹之助の怒りは頂点に達した。

「馬鹿にしゃがつて——！」

激昂した竹之助が、怒りに任せて走りこんでくるのを刀越しに目で捉えながら、元左衛門は微動だにせずに構える。

彼我の距離が縮まり、竹之助の刀が振り下ろされようとしたまさにその時、元左衛門の体が陽炎のようにゆらりと動いた。

——瞬。

互いの位置が入れ替わつたと見えた直後、竹之助が脇腹を押しさえて膝をついた。風を斬り振り抜かれた元左衛門の鞘が、竹之助の横腹を過たず打つたのだ。

「見逃してやる。疾く去れ」

刀を奪い、上から言い捨てる。屈辱と痛みで顔を歪めた竹之助の姿が遠く消えると、元左衛門は見ていた町の者に「騒がせたな」と言い、去っていった。

このち、箕垣藩の領民の間で越野元左衛門の評判はますます高まり、武士の耳にも入った。やがて、藩士たちは元左衛門を「抜かずの元左」と尊敬を込めて渾名するようになったという。

竹之助との勝負を終え、家に帰った元左衛門は刀を畳に放り投げ、寝転がって鞘から抜いた竹作りの刀身を眺めた。

「——やはり、刀は取り戻さないといかんな」

生活に困窮した武士たちの中には、武士の魂たる刀を質に入れて活計を立てている者もいた。名高い達人である元左衛門とて、例外ではなかったのである。